論　文

バルカン諸言語の関係節における重叙代名詞の役割

井浦　伊知郎

0. 序

0.1. 目的語の重叙表現

目的語と数・格（・性）において一致する人称代名詞の弱形が同一文中に重複して現れること（以下『目的語重叙』或いは『重叙』）は、バルカン諸言語（標準セルビア語を除く）に定着した現象として知られている（Buchholz / Fiedler 1987, 439ff.）。各言語の例は1.以降で見ることにするが、ここでは現代ギリシア語のごく簡単な例をあげておく。

(1) Τον ξέρω τον Κώστα.

「（私は）コスタスを知っている」

こうした目的語重叙は統語構造に関連しているだけでなく、意味論の領域でも重要な役割を果たしている。基本的には、目的語がいわゆる「主題」の領域に属する場合、弱形人称代名詞（目的語標識 Objektzeichen）による重叙が生じる（Buchholz / Fiedler 1987, 439-445）。或いは、目的語が「定（定冠詞または定形語尾をとる）」であるか「不定」であるかという点だけでなく、談話の構造において「特定」か「非特定」かという点でも決まる。例えば次の例では定冠詞を伴わない「セーター」にも重叙代名詞が用いられている（Kazazis / Pentheroudakis 1976 及び Berent 1977）。

(2) Σου το πλέκω ένα πουλόβερ.

「（セーターと言えば）（私は）君に一着セーターを編んでいる」

0.2. 重叙表現をめぐる歴史的見解

ここで、この現象の歴史的起源を巡る諸説を一瞥しておこう。人称代名詞（主に3人称）による目的語の「繰り返し」は他地域の言語にも存在し、類型論の

分野で興味深い例が報告されている（Givón 1984, 360-372）が、密接した言語間で同種の現象が相互に影響し発展しているバルカン諸言語（標準セルビア語を除く）には、重叙現象発生の起源や言語間の発展経路などをめぐる通時的問題が存在する。

重叙現象の歴史的経緯には依然不明の点が多いが、比較的新しい包括的見解（Demiraj 1993 及び 1994）によれば、確定した文法形式として定着・発展した時期は、これまで考えられてきた程古いものではないという。基層言語であるイリュリア語からアルバニア語への継承という説（Miklosich 1862）には、今日なお議論の余地がある。

いま一つの仮説は、ヴルガタ・ラテン語からの借用、定着（Илиевски 1972/1973）というものである。しかしバルカン諸語内における重叙現象の拡大定着は、同時期の西ロマンス語よりもはるかに規模が大きく、ヴルガタに起源を求める程古いものでもない（Demiraj 1993, 219）。

ブルガリア語とマケドニア語からの影響による（Милетичъ 1937）という見方もある。しかし両言語の重叙現象は9世紀以降に現れ、早くとも12～13世紀に他のバルカン諸語の影響化で成長したものと考えられる。他のスラヴ諸語に同様の現象が見られない点からしても、これを南スラヴ語固有の現象と見るのは難しい（Demiraj 1994, 136-137）。

一方、ルーマニア語からの影響という説もある。目的語と弱形代名詞の併用については、各ロマンス語で不均一な発展が見られる。ルーマニア語で重叙現象が確認されたのは 16～18 世紀であるが、現在の様な頻出は認められない（Demiraj 1993, 219）。アルバニア語とマケドニア語で義務的な間接目的語の重叙はルーマニア語において任意、また直接目的語の重叙は前置詞 pe の有無等により用法が制限される（林 1990）。

では、ギリシア語から周辺言語への影響は考えられるだろうか。Илиевски（1972/1973,216） は、ヘレニズム期のギリシア語に目的語の二重表現が見られるが、これは結局体系化されておらず、またアルバニア語等と接触していた北部方言を除き、現代ギリシア語のどの方言にもこの特性が現れなかったことを指摘している。代名詞重叙は、書かれたテクストに関する限りそれ程古い現象ではない（Demiraj 1993, 137）[1]。

0.3. 本論文の目的

ところで、上に述べた重叙現象は単文にのみ見られるものではない[2]。例えば、

関係代名詞が関係節の内部で目的語となっている場合、これに一致する人称代名詞弱形が関係節内に現れることがある（Sandfeld 1930, 107）[3]。また関係代名詞には、性・数・格によって変化するものと、全く語形変化しないものがあるが、どちらをとるかによって関係節内の重叙が生じない場合もある。

本論文では、こうした関係代名詞[4]の種類により重叙の有無にどの様な相違があるかを５つの言語について比較対照する。

1. アルバニア語

アルバニア語の関係代名詞には、性・数・格によって語形変化する i cili と、全く語形変化しない që がある（Buchholz / Fiedler 1987, 300-302）。目的語としての i cili は対格・与格いずれにおいても常に重叙代名詞を伴う。

(3) shoku im, <u>të cilin</u> <u>e</u> njeh edhe ti
friend-def.sg.nom. my which-m.sg.acc. 3.sg.acc. know-sg.2 also you
「君も知っている友人」

通常 që は主語か直接目的語として用いられ、目的語としての代名詞重叙は起こり得るが、義務的ではない。

(4) Librat, <u>që</u> më dhe, i lexova.
book-def.pl.acc. that me give-aor.sg.2 3.pl.acc. read-aor.sg.1
「君が僕にくれた本は読んだ」

(5) shamia <u>që</u> <u>e</u> mbante në dor
handkerchief-def.sg.nom. that 3.sg.acc. hold-impf.sg.3 in hand-def.sg.acc.
「手に持っているハンカチ」

2. ルーマニア語

ルーマニア語の関係代名詞には、語形変化する care、そして語形変化するが主格と対格で同形の ce がある（Beyrer / Bochmann / Bronsert 1987, 119-121）。関係詞としての ce は主格と対格にしか用いられないので、事実上不変化と言える[5]。関係節内で重叙を伴うのは常に care で、これは義務的なものである。

(6) Am un vecin <u>pe care</u> <u>îl</u> văd în fiecare zi.
have-sg.1 one neighbour which (acc.) 3-m.sg.acc. see-sg.1 in every day
「私には毎日会う隣人がいる」

これに対して ce は重叙を生じない。

(7) Aseară mi-a împrumutat roata ce i-am cerut.
last night me loan-pf.sg.3 wheel that him request-pf.sg.1
「彼は私が欲しがっていた自転車を貸してくれた」

3. マケドニア語及びブルガリア語

ブルガリア語の関係代名詞には、語形変化する който[6] と、変化しない що がある（Стоянов 1984, 300-301 及び Мирчев 1963, 168-169）が、これらに対して重叙代名詞が現れる例は見られない。特に що は、主格以外で用いられること自体が相対的に少ない。

(8) Искаш ли този чай, който Таро е донесъл от Япония ?
want-sg.2 interrogative this tee which bring-pf.m.sg.3 from Japan
「太郎が日本から持ってきたこの茶が欲しいかい？」

(9) Това е другарят, на когото дължим благодарност.
this be-sg.3 comrade-def.sg.nom. to whom be obliged-pl.1 thanks
「こちらは私達がお世話になっている方です」

(10) Направи, що можеш!
do-imp.sg.2 [that] which can-sg.2
「できることをしなさい」（先行詞なし）

これに対してマケドニア語では一般に што が用いられ、関係詞で導かれる語が関係節中で目的語となる場合は常に重叙する。語形変化する koj（指示代名詞と同形）や што との複合形 којшто は、前置詞を伴う関係詞の場合、また што のみでは統語的関係（特に先行詞の性・数）が曖昧になる様な場合に用いられる（Lunt 1952, 44-45 及び Bojić / Oschlies 1984, 56-59）。従って којшто における重叙の条件は што の場合と同様だと言えよう。この点、同じ南スラヴ語であるブルガリア語の който と що の関係とは明らかに異なる。

(11) Детето што го сретнавме е синот на
child-def.sg.nom. that 3.m.sg.acc. meet-past.pl.1 be-sg.3 son-def.sg.nom. of
мојот другар.
my friend
「我々が会った子は友達の息子だ」

(12) оваа земја, на_која ѝ даде свој личен печат
this world to whom 3.f.sg.dat. give-past.sg.3 own personal seal
「（彼が）自分の個人的印象を与えた世間」

4. 現代ギリシア語

4.1. 現代ギリシア語における目的語重叙

民衆語において、人称代名詞の強形（absolute Form）と弱形（Pronomen conjunctum）が同時に現れることは、今世紀初めの文献で指摘されている（Thumb 1910, 81）[7]。特に強調がない場合は弱形のみが用いられる。

(13) Εμένα με ξέρεις.「私を知ってますね」

(14) Τό 'βρηκε το μέρος.「彼はその場所を見つけた」

(15) Τ' άλλα τα 'βραν κυνηοί. (*sic*)「その他のものを猟師は見つけた」

重叙代名詞は、目的語に先行する proleptic pronoun（『予期』的代名詞）と、目的語よりも後に来る resumptive pronoun（『繰り返し』的代名詞）に分けられる。これらはいずれも動詞の直前に置かれる（Mackridge 1985, 223-224）。

(16) Την ξέρεις τη Λούλα ;「ルーラを知っているか？」（proleptic pron.）

(17) Τη Λούλα την ξέρω.「ルーラなら知っている」（resumptive pron.）

一般に proleptic pronoun に重叙される目的語は言及済みの情報となり、目的語以外を新たに言及されるべき情報として、そこに強勢が置かれる。例えば次の文では「欲しい」に強勢が置かれる。

(18) Το **θέλω** αυτό το βιβλίο.「この本が**欲しい**」

一方次の文は Τι θέλεις; や Ποιο βιβλίο θέλεις; といった疑問文への答えと考えられ、重叙しない「本」に強勢が置かれる。

(19) Θέλω **αυτό** το βιβλίο.「欲しいのは**この本**だ」

resumptive pronoun の用法には proleptic pronoun のそれに似た点もある。次の例 (20) と (21) では、重叙の有無と強勢との関係が例 (18) (19) の場合と同じである。

(20) Αυτό το βιβλίο το **θέλω**.　　「この本が**欲しい**」
(21) **Αυτό το βιβλίο** θέλω.　　「欲しいのは**この本**だ」

同様の例をもう一組あげておこう。

(22) Τη Μαρία την **αγαπάει ο Γιάννης**.　（『ヤニス』または『愛する』に強勢）
「マリアを愛しているのはヤニスだ」
(23) **Τη Μαρία** αγαπάει ο Γιάννης.　（『マリア』に強勢）

しかし proleptic pronoun と違う点もいくつかある。例えば、定冠詞を持たない（つまり『定』でない）名詞にも対応できる。この場合、先行する目的語の直後に小休止を置いて発話するのが普通である。

(24) Φρούτα | τα **τρώει** καμιά φορά.
「（一般的に）果物（と言えば、それ）は時々食べる」

そして、関係代名詞（που, ο οποίος）に呼応する場合がある。これが本論文の主な考察対象であり、次節（4.2.）で詳説する。

その前に resumptive pronoun が文脈に与える意味をもう少し見ておこう。この代名詞によって重叙するのは、文中で目的語以外の要素が強調される場合である。一方重叙しない時は文そのものが「無色」の表現（または『中立的』。強調される文成分なし）であるか、または目的語自体が「焦点」として強められている場合である。

(25) **Ο Γιάννης** την **αγαπάει** τη Μαρία.　（『ヤニス』または『愛する』に強勢）
(26) Ο Γιάννης αγαπάει **τη Μαρία**.　（無色な文。または『マリア』に強勢）
「ヤニスはマリアを愛している」

この２例を比較すると、目的語重叙の状態から弱形人称代名詞が除かれることで、あたかも目的語が文の中で「際立ってくる」様に見える。

筆者の知る限り、同じバルカン諸言語の中ではアルバニア語にこれと似た傾向が見られる。アルバニア語の目的語は重叙代名詞を伴う頻度が他の言語と比べて高い。従って（基本的に重叙現象がない言語の場合の様に）重叙によって目的語に特別な意味合いを持たせるというよりも、むしろ重叙しない場合、つまり「本来あるべき」重叙代名詞が削除された場合にこそ、目的語を文脈にお

いて際立たせる様な機能があるものと考えられる。この点については、後の考察でもう一度触れることになろう。

4.2. 関係代名詞の重叙

次に、関係詞に対する重叙現象に限って見ると、先行詞をとる関係代名詞の中では語形変化しない που にしばしば重叙が見られ、語形変化する ο οποίος には目的語重叙は起こらない[8]。そこで、以下 που を用いた例のみ見ていくことにするが、これには大別して2種類の機能がある（Mackridge 1985, 225）。

（1）制限節・非制限節の区別

例 (27) の様な制限節の内部に重叙代名詞をとることは，通常ない。

(27) Η γυναίκα <u>που</u> είδε ο Γιάννης ήταν η μητέρα της κοπέλας.

「ヤニスが会った女性はその少女の母だった」

(28) Η Μαρία, <u>που</u> <u>την</u> είδε ο Γιάννης, ήταν η μητέρα της κοπέλας.

「マリアにはヤニスが会ったが、彼女はその少女の母だった」

（2）統語的機能の判別

これは「制限節・非制限節の区別」に優先する機能である。

(29)（関係代名詞の先行詞が関係節内で主語となる場合）

ο άντρας <u>που</u> σκότωσε το παιδί「子供を殺した男」

(30)（関係代名詞の先行詞が関係節内で目的語となる場合）

ο άντρας <u>που</u> <u>του</u> σκότωσε το παιδί「子供が殺した男」

(29) では主格・対格同形の το παιδί「子供」が主語か目的語か（要するに『殺された』のか『誰かを殺した』のか）見分けにくく、「男」が関係節内で目的語なのか主語なのかもはっきりしなくなる。そこで (30) の様に「男」を指す που が関係節内で目的語として用いられる場合には、それに呼応する対格の代名詞が出てくるのである。ここでは専ら直接目的語の場合について見ているが、間接目的語の場合もこうした重叙代名詞がきちんと現れる[9]。

5. 結論

1. から 4. までを踏まえ、各言語の関係代名詞と重叙との関係を整理してみよう。

	アルバニア語	ルーマニア語	ブルガリア語	マケドニア語	現代ギリシア語
屈折型	i cili (++)	care (++)	който (-)	кој што (++)	ο οποίος (-)
非屈折型	që (+)	ce (-)	що (-)	што (++)	που (+)

(＋＋義務的に重叙、＋任意的に重叙、－重叙しない)

この表についてはいくつか注意すべき点がある。まず、この分類表は統語構造のみに依拠して作成されており、個々の文例の関係節における意味内容の差異は考慮されていない。またここで示されているのは直接目的語の場合であり、間接目的語となる場合には内容が若干異なる。例えば（きわめて稀だが）アルバニア語の që に対する代名詞重叙は、与格では義務的である。更にブルガリア語の що やマケドニア語の кој што の様に用例が比較的少ないものについては、例外が皆無とは言えず、重叙の有無を完璧に二分することはできない。各言語間の重叙の度合は、あくまで相対的なものと考える方が賢明である。

目的語重叙も含めたバルカン共通の言語現象（定形語尾、不定詞の消失など。いわゆる『バルカニズム』）全般について見ると、それらの現れる度合いの強さはほぼアルバニア語、マケドニア語、ブルガリア語、ルーマニア語、現代ギリシア語、セルビア語の順になるという指摘がある（寺島 1991, 116）。また重叙現象の頻度に限った場合、セルビア語を除く５言語の中でアルバニア語（与格において義務的に重叙）が依然上位に留まり、これとほぼ同様のルーマニア語とマケドニア語が同列に並び、次いでブルガリア語、現代ギリシア語の順となる。

では関係節における重叙についてはどの様な特徴があるだろうか。上表で見る限り、５つの言語はその傾向によって大きく３つのグループに分けられる。

第一はアルバニア語とルーマニア語で、これらは屈折型において重叙現象が義務的であるという点で共通している。

第二はブルガリア語とマケドニア語である。ブルガリア語では関係代名詞の重叙そのものが全くと言ってよい程見られず、一方マケドニア語では関係節の種類にかかわらずほぼ重叙が生じている。この様に重叙の有無は正反対であるが、屈折型と非屈折型で重叙の傾向に事実上差がないという点では共通している（このことを視覚的に示す為、この両言語のみ上下の項目が仕切られていない）。

第三は現代ギリシア語で、非屈折型でのみ重叙が起こり得る。

同じ南スラヴ語であるマケドニア語とブルガリア語とで、関係節内における

重叙の有無に明らかな相違があるのは注目すべきことである。そもそもマケドニア語は、ブルガリア語よりもバルカニズムの傾向が強く、隣接するアルバニア語との相互影響の可能性が考えられるのだが、今回の結果にもそうした傾向の一端が垣間見える。

更に興味深いのは、第一のグループと第三のグループとで正反対の傾向が見られることである。現代ギリシア語の非屈折型 που が重叙代名詞をとり得る理由については、4.2.で述べた通りでよいと考えられるが、アルバニア語とルーマニア語の場合、むしろ屈折型使用の際に重叙が求められている様に見える。

これについて一つの可能性を示すと、まず第一グループの両言語においてはもともと目的語重叙という現象の頻度が高いので、特に resumptive pronoun である関係詞の重叙代名詞についてはそれが常用化し、有標性をもはや持たなくなっているのでないか、ということが考えられる。しかもルーマニア語では、2.で述べた様に非屈折型 ce の選択基準が著しく制限されており、現代ギリシア語の様に統語関係の判別という理由から重叙する必要性も低い。稀少例の存在は考えられるものの、全般的には care と ce の使い分けが充分に為されていることで、「重叙し得る屈折型」と「重叙しない非屈折型」への二極化が起こっているのではないだろうか。

ただ、アルバニア語についてはこうした解釈も充分なものではない。非屈折型 që における重叙の問題については、ルーマニア語の ce とほぼ同じく主語及び直接目的語としての場合に用法が制限されていながら、重叙の傾向が ce の場合と一致しない。これについては、4.2.でギリシア語の場合に見られた制限節・非制限節の区別や、関係節の意味内容が関与している可能性もあり、更に検討を要する。

註

1) 重叙現象の歴史的研究について、更に詳しくは Schaller（1975, 161-171）参照。

2) 弱形人称代名詞を用いた表現としては、本文では扱わないが更に二つの種類がある。一つは、「冗長な」弱形代名詞で、現代ギリシア語には次の様な例がある（関本 1976, 258）。

Τα έχασε.「彼／彼女は困惑した」

Τα τέντωσε.「彼／彼女は死んだ」

これらの τα は統語上必須とされるだけで、文の意味自体には寄与していない。また筆者の知る限り、こうした表現はアルバニア語に多く存在する。動詞 arrij「到達する」による例を挙げる（Buchholz / Fiedler 1987, 445）。

Gori　　ia　　arriti　　qëllimit.

3.sg.dat.+3 sg.acc.　achieve-aor.sg.3　goal-def.sg.dat.

「ゴーリは目的を達成した」

こうした例は慣用表現の部類に属するが、目的語標識のうち対格の方（すなわち融合形 ia＝i＋e の e）は、何も指し示していない。だがこれは文構造において「冗長」どころか必須の成分である。ちなみに Fiedler は、本来この様な弱形人称代名詞を「冗長（pleonastisch）」なものと呼ぶべきであり、本文で扱っている従来の重叙代名詞はこれに当たらないと述べている。

いま一つは、目的語補文節に対する重叙である。次の例では、proleptic pronoun としての το が後に出てくる節を指している（Mackridge 1985, 224）。

Το **φανταζόμουνα** πως δε θυμάσαι.「君が憶えていないのではと**想像した**」

これは話し言葉に見られる現象で、動詞「想像する」に焦点が置かれている場合、名詞節の重叙が起こっていると考えられる。しかし格式表現の場合（純正語の影響と思われるが）動詞や主語に強勢があってもこの様なことは起こらない。

一方、先に出た節に呼応して resumptive pronoun が現れるという例もある（Mackridge 1985, 224）。この様な表現では、 proleptic pronoun の場合よりも多くの種類の名詞節（ό, τι や όσος などによる）を用いることができる。

Ό, τι είχα να πω, το είπα.「私が言わねばならぬことは言った」

一方アルバニア語には、接続詞 se（または që）を用いた文で次の様な例がある。

Unë　e　　dija　　se　do të votohet.

I　3.sg.acc.　know-impf.sg.1　that　be delayed-fut.refl.sg.3

「私は、彼が遅れて来ることを知っていた」

上の例文から e を削除できない場合がある。これは、補文が主要部動詞に対して直接目的語の位置にあり、補文に示された内容が既知の事柄として表わさ

れている時、要するに文の主題となる時に重叙を生ずるからである。

3) 関係節の内部に関係詞と一致する人称代名詞を伴う例は、ヘブライ語など他地域の言語にも見られる（Givón 1990, 667 及び Keenan 1985, 151-152）。次のチェコ語の例には、本文で扱う現象に類似した使い分けがある。関係代名詞 co と který は共に語形変化するが、co は主格と対格において同形である（Keenan 1985, 151）。

Jan viděl toho muže, co ho to děvče uhodilo.
see-past. that man which him that girl hit-past.
Jan viděl toho muže, kterého to děvče uhodilo.
see-past. that man which-m.sg.acc. that girl hit-past.
「ヤンは、その女性が殴った男を見た」

4) 本文で扱う関係代名詞は、例 10 を除き、先行詞を伴うものに限っている。

5) 話し言葉では、しばしば ce が前置詞 de を用いた構文に置き換えられる。

6) 基本的に全ての格で който が用いられる。対格形 когото と与格形 комуто は主に文章語で、先行詞が人間を示す男性名詞の時に用いられる。

7) Лопашов（1975, 9-10）はギリシア語における弱形人称代名詞による直接目的語の「繰り返し」は、3人称の場合任意的だが、1・2人称の場合規則的に行なわれると述べている。但し間接目的語には見い出せなかったという。

8) 属格では του をとることがある。

9) που の先行詞が関係節内で間接目的語として用いられている例は、次の様なものである（Mackridge 1985, 249）。

Ο άνθρωπος που του δάνεισα τα λεφτά είναι ο θείος μου.
（＝ ... στον οποίο δάνεισα ...）「（彼に）金を貸した人は私の叔父だ」

この場合、属格代名詞が関係節中で重叙代名詞として用いられている。

参考文献

Berent, Gerald P.(1977): Specificity and the Reduplication of Indefinite Direct Objects in Macedonian. *CLS Book of Squibs,* 1977, 12-14.

Beyrer, Arthur / Bochmann, Klaus / Bronsert, Siegfried (1987): *Grammatik der rumänischen Sprache der Gegenwart.* Leipzig : Verlag Enzyklopädie.

Bojić, V., Oschlies, W.(1984): *Lehrbuch der mazedonischen Sprache.* München.

Buchholz, Oda / Fiedler, Wilfried (1987): *Albanische Grammatik.* Leipzig : Verlag Enzyklopädie.

Demiraj, Shaban (1993): *Historische Grammatik der albanischen Sprache.* Wien : Österreichische Akademie der Wissenschaften.

Demiraj, Shaban (1994): *Gjuhësi ballkanike.* Shkup : Logos-A.

Givón, Talmy (1984): *Syntax. A functional-typological introduction,* Vol.1. Amsterdam / Philadelphia : J.Benjamins.

Givón, Talmy (1990): *Syntax. A functional-typological introduction,* Vol.2. Amsterdam / Philadelphia : J.Benjamins.

Kazazis, Kostas / Pentheroudakis, Joseph (1976): Reduplication of Indefinite Direct Objects in Albanian and Modern Greek. *Language* 52, 398-403.

Keenan, Edward L.(1985): Relative clauses. *Language typology and syntactic description,* Vol.2 (ed.by T.Shopen). Cambridge : Cambridge Univ.Press.

Lunt, H.G. (1952): *Grammar of the Macedonian Literary Language.* Skopje.

Mackridge, Peter (1985): *The Modern Greek Language.* Oxford : Oxford Univ.Press.

Miklosich, Franz (1862): Die Slavischen Elemente im Rumunischen. *Denkschriften der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften (Philosoph.-hist.Classe)* 12, 1-70.

Mirambel, André (1987): *Grammaire du grec moderne.* Paris : Klincksieck.

Sandfeld, Kr. (1930 / rpt. 1968): *Linguistique balkanique. Problémes et résultats.* Paris : Klincksieck.

Schaller, Helmut Wilhelm (1975): *Die Balkansprachen. Eine Einführung in die Balkanphilologie.* Heidelberg : Carl Winter.

Thumb, Albert (1910 / rpt. 1974): *Handbuch der neugriechischen Volkssprache.* Strassburg : de Gruyter.

Walter, Hilmar (1966): Zum Problem der sogenannten verdoppelten Objekte in den Balkansprachen. *Wissenscahftliche Zeitschrift der KMU Leipzig* 15, 549-553.

Илиевски, Петър Хр. (1972 / 1973): Кон интерпретацијата на моделот на удвоениот објект во македонскиот јазик. *Годишен зборник,* 24/25, 205-220.

Лопашов, Ю. А. (1975): *Местоименные повторы дополнения в балканских языках.* [Автореферат] Ленинград.

Милетичь, Л. (1937): Удвояването на обекта въ българския езикъ не е "балканизъмъ". *Списание на Българската Академия на Наукитѣ (клонь историко*

- *филологичень и софско - обществень)* 56 (28), 1-20.

Мирчев, Кирил (1963): *Историческа граматика на българския език*. София.

Стоянов, Стоян (1984): *Граматика на българския книжовен език*. София.

関本至 (1976):「現代ギリシア語における重叙表現」『広島大学文学部紀要』35, 250-259.

寺島憲治 (1991):「ブルガリア語入門」『言語』12, 113-119（なお詳しくは東京大学教養学部 1982 年度科学研究費研究『バルカン諸言語における言語圏現象の総合的研究』中の森安達也「バルカン諸語における現代ギリシア語の位置」参照.）

林博司 (1990):「ルーマニア語二重代名詞について」『アジアの諸言語と一般言語学』，東京（三省堂）.

Zu den Funktionen der verdoppelten Personalpronomina innerhalb der Relativsätze in Balkansprachen

IURA Ichiro

In allen Balkansprachen, außer dem Serbischen, ist die Verdoppelung des durch die Kurzform des Personalpronomens ("Objektzeichen") ausgedrückten Objekts (entweder direkt oder indirekt) wohlbekannt. Dieses Phänomen kann man auch in Relativsätzen finden, wenn das Relativpronomen sich als Objekt innerhalb des Relativsatzes verhält.

Dieser Aufsatz behandelt die verschiedenen Funktionen der Verdoppelungen der Relativpronomina, im Vergleich zwischen den wichtigen Balkansprachen, d.h. dem Albanischen, dem Rumänischen, dem Bulgarischen, dem Mazedonischen und dem Neugriechischen.

Einfache Sätze in jeder dieser Sprachen vergleichend kann man verschiedene Grade des Erscheinens der Objektsverdoppelung finden. Im einfachen Satz werden das Nomen bzw. Nominalgruppen als Objekt im Albanischen am häufigsten verdoppelt. Danach folgt Rumänisch, Mazedonisch und Bulgarisch. Im Vergleich zu allen anderen Balkansprachen ergeben sich die Objektsverdoppelungen im Neugriechischen nicht so häufig.

Die Objektsverdoppelung, die man mehr oder weniger in allen Sprachen finden kann, hat nicht nur syntaktische, sondern auch semantische Funktionen im allgemeinen, z.B. das Erscheinen des mit dem Objekt grammatisch bereinstimmenden Personalpronomens hebt die Thema-Rolle des Objekts im Zusammenhang mit dem vorausgesetzten Kontext hervor. Auch die Balkansprachen kennen Hervorhebung durch Verdoppelungen. Aber in einigen Balkansprachen, in denen die Objekte überaus häufig verdoppelt werden, führt dieses Phänomen eine andere Funktion in die Texte ein. Besonders im Albanischen und Rumänischen ist Objektsverdoppelung obligatorisch, deshalb wird die Verdoppelung als unmarkiert begriffen, vielmehr wird das Fehlen des verdoppelten Personalpronomens als Markierung verstanden.

In Relativsätzen hängt das Erscheinen der Objektsverdoppelung auch davon ab, ob der Relativsatz durch das deklinierbare oder das undeklinierbare Relativpronomen eingeleitet wird. Im Albanischen und Rumänischen ist die Verdoppelung des deklinierbaren Relativpronomens als Objekt obligatorisch, während die der undeklinierbaren fakultativ oder unnötig ist. Andererseits kann man bei den

neugriechischen Relativpronomina das Gegenteil finden, d.h. da das undeklinierbare Relativpronomen die Verdoppelung durch das Personalpronomen oft benötigt, das deklinierbare jedoch nicht. Im Mazedonischen braucht das Relativpronomen, als Objekt im Relativsatz, immer das verdoppelte Personalpronomen, während das im Bulgarischen ziemlich selten der Fall ist.

In den albanischen und rumänischen Relativsätzen gibt es etwas andere Bedingungen zur Verdoppelung als in den neugriechischen. Im Neugriechischen, kann man sagen, wird das Objektzeichen benutzt, um die syntaktische Beziehung (z.B. Kasus) des undeklinierbaren Relativpronomens im Satz deutlicher zu machen. Im Albanischen und Rumänischen sind die Verbindungen zwischen den deklinierbaren Relativpronomina und den damit grammatisch übereinstimmenden Objektzeichen fixiert, wie die Regularität der Objektsverdoppelungen in den einfachen Sätzen. Es ist auch möglich, da der Gebrauch der nichtverdoppelten Relativpronomina beschränkt wird, um syntaktische Ambiguitäten im Satz zu vermeiden.

In den mazedonischen und bulgarischen Relativsätzen ist die Häufigkeit der Verdoppelungen der Relativpronomina ganz unterschiedlich, obwohl beide Sprachen zur südslawischen Sprachgruppe gehören. Die Verdoppelungserscheinung im Mazedonischen läßt sich eher mit Sprachphänomenen des Albanischen vergleichen, das dem Mazedonischen auch geographisch näher liegt.